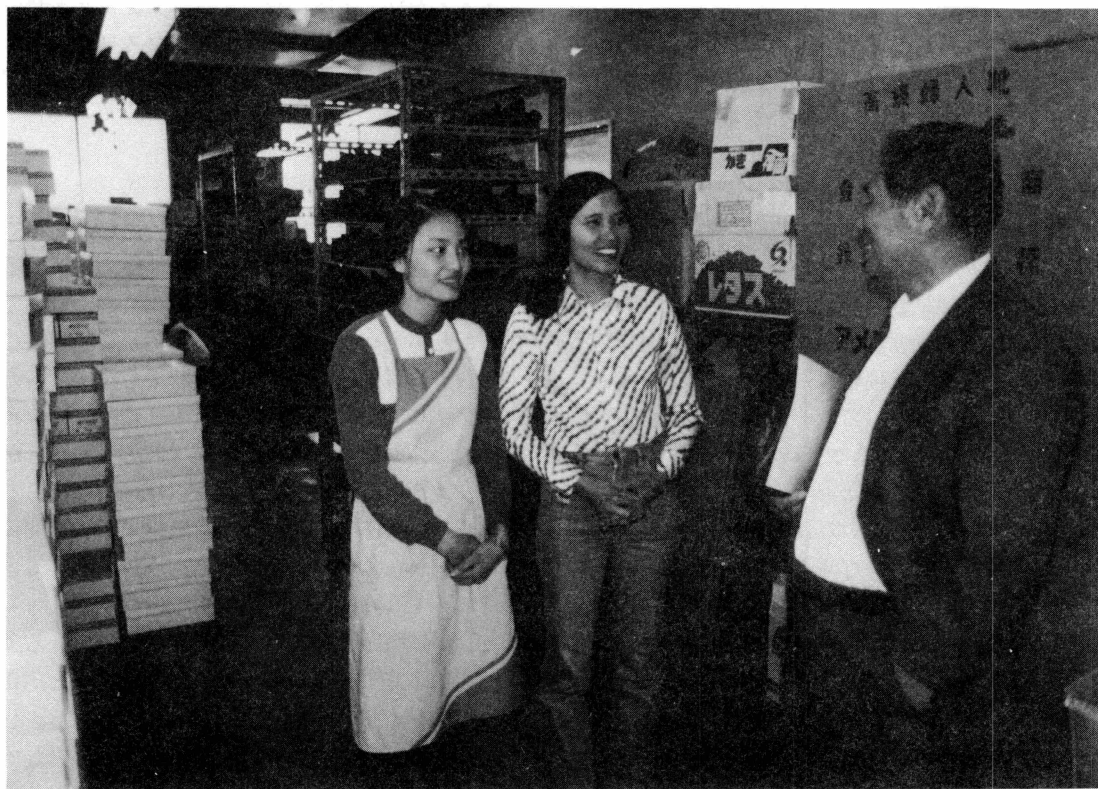


Trial & Error トライアル・アンド・エラー No.73

試 行 錯 誤



とにかく日本でがんばります
(提供) アジア福祉教育財団難民事業本部

特集 定住難民と雇用問題

定住難民と雇用問題	2
●定住6年目の独立	4
●取材上のトラブルから見てきたもの	6
●やっぱり日本人の方が楽です	7
もう1つの就職最前線	8
在日外国人の友人として T/Eのお詫びに関する所の感	10
在日外国人の同僚として 職場は摩擦がいっぱい	11
カンボジア難民殺人事件の背景	12
NGOを訪ねて——カリタス・ジャパン	13
JVC学習会 在日の意味を考える	14
私的フィリピン事情 彼女たちはなぜ出稼ぎに行くのか	16
JVCNEWS	18
兵士との出会い	20

定住難民と雇用問題

フィ・ムウン事件

小雨模様の8月28日、横浜地方裁判所小田原支部でフィ・ムウン事件（カンボジア難民母子殺害事件）の第6回公判が開かれた。公判の始まる午前10時前から「フィ・ムウンさんを見守る会」の会員やNGOの関係者が20人近くつめかけていた。

この日はフィ・ムウン被告が収容されていた大和定住促進センターの内藤所長の証人喚問が行われた。1つずつ事実が検証されていく。彼の性格、日本語の力、家族関係、勤務態度、そして今回の事件を招き寄せることになった傷害事件。

被告は妻子殺害についてはその事実を全面的に認めており、その限りにおいては難しい裁判ではないという。しかし彼がカンボジア人として日本の中でいかに傷つき、自分を追いこんでいったのかはもっと明らかにされなければならない。今回の事件の責任は彼だけに帰せられるのか。日本人の側の責任はなかったのか。今後このようなことを再び起こさないためにはどうしたらいいのか。曹洞宗ボランティア会や幼い難民を考える会などが定住難民のための電話相談を行っているが、1部のボランティアの人に任せておいていいものなのか。

日本人の価値観と彼らの価値観は必ずしも一致しない。何げない一言で深く傷ついてしまったり、良かれと思ってした親切が相手に通じないこともある。また逆に難民の人々にとってはなぜ自分が責められているのかわからない場面もあるだろう。

これから公判を重ねるごとに事件の全貌は明らかになっていくと思われる。しかし判決が降りるまで人々の関心は続くだろうか。すでに「フィ・ムウンさんを見守る会」は資金難に直面している。裁判費用はまだ目標の半額しかなく、通信費でさえ一部の会員の負担になっている。この会は決してフィ・ムウンという個人を助けるために作られたのではない。この裁判を通じて、彼に代表されるような異文化に溶けこめない人、疎外されている人と、そういう人を取りまく私たちの関係を見直し、外国人に対し閉鎖的といわれる日本社会を少しでも開かれたものにしていくことが目的だ。

フィ・ムウン事件に関しては、引き続き大ぜいの人に関心を持ってもらいたいし、マスコミの人々もこの事件の背後にあるものへの問いかけを忘れないでほしい。

日本語の重要性

フィ・ムウン事件はまだ公判中であり、ここで論評することは差し控えたいが、事件後の各新聞紙上では、日本語が十分に話せなかったことが原因ではなかったかといわれた。

今回定住難民の雇用について特集を組み、各方面にインタビューを行ったが、日本での定住の決め手は日本語の力にあることを改めて確認することができた。言葉がわからないことで引込思案になってしまい、意志を伝えられないから職場での人間関係もうまくいかなくなる。また資格も得ることができず、したがって高い収入の職業にもつけない。

たしかに職場の中で言葉を学ぶことはできる。日本に定住して7～8年も経た人たちを見ると、日常生活にはなんら困っていないようにも見える。しかしよく聞くと日本語を学ぶために必死で努力しているのだ。言葉がわからないため、誰か日本人がついていないと何もできない、その自分のふがいなさに泣いた経験を語ってくれた人。今では十分に日本語がわかると思えるのだが、「難民を助ける会」の塾でさらに日本語の勉強を続ける人。それぞれが言葉の重要性を痛感している。

各センターでは3カ月間日本語を学べるが、若く、よほど優秀な人ででもなければ、そこで修得できるのはほんの片言に過ぎない。タイのチュラロンコン大学アジア研究所のスパン・チャントビニッチ助教がまとめた「日本とインドシナ難民」という報告書にも、3カ月の日本語の訓練では不十分だと指摘されている。センターを退所した後は、仕事が終わってからJVCをはじめとするボランティア団体や教会、個人のボランティアに日本語を学んで補う。時には企業側が日本語を教えることもある。

もちろんインドシナ難民が日本社会に定住していくためには言葉以外の問題も数多くある。母国と日

本の文化・習慣の違い、日本社会の外国人に対する偏見や閉鎖性など、一朝一夕には解決できないことが多い。これらのことは日本社会と在日外国人がぶつかりあう中で長い時間をかけて解決していくしかない。しかし言葉については、研修期間をもう少し長くするとか、なんらかの工夫をすることで、ある程度は改善できるのではないだろうか。

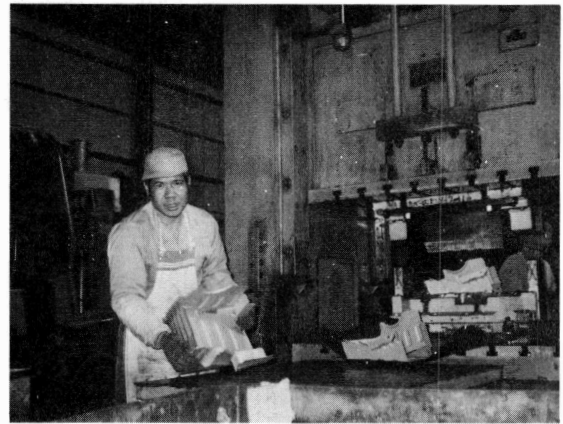
なお蛇足ではあるが、日本語を教える人も単に言葉としての日本語を教えるだけでなく、難民問題それ自身にも関心を持っていただきたいと思う。

どんな企業で働いているのか

インタビューする中でもう1つ考えさせられることがあった。大企業は生産効率第一主義で、難民をわざわざ採用しなくても日本人が十分に集まる。そのために難民の雇用はほとんどないのだと、これまで企業側の立場でしか雇用問題を見てこなかった。しかし難民たちは、ホンダ、ソニーにあこがれている若い人は別として、もっと堅実に考えているようだった。中小企業で言葉も技術も教えてもらった方がよい。大企業では1人の難民のためにつきっきりで面倒を見る人間など置いていない。それに給料についても企業の大小によってそれほど上下することはない。これが難民たちが企業の大きさとらわれていない理由だった。もちろん倒産の危険度は小さい企業の方が高いが、「寄らば大樹の陰」という考え方は日本人ほど強くないようだ。

そうはいても、やはり大企業は社会的責任を果たしていないように思う。カンブチアで、ラオスで、政変前にいくつかの企業は駐在員を置き商売をしていたはずなのに、これらの企業がどれほどの難民を雇用しただろうか。別の立場だが、現在のベトナム、カンブチアにも取引きをしようとすでに商社の駐在員が入っているが、援助の申し出については聞いたことがない。

私たちが見た限りでは難民を“安い労働力”として雇用している事業所はなかった。センターでははじめからそういう企業には彼らを紹介していないし、雇用主は難民に住宅を提供するなど、むしろ日本人を雇用するよりも“高くつく”かもしれない。やはり日本人（特に若い人）の働きたがらない職場——住み込みだったり、休みがなかなかとれない会社、重労働で悪臭を伴う会社、そのために従業員の入れ替えが激しい会社、そして経営者が在日中国、朝鮮人など日本社会から差別されている会社等が多い。



定住するのは厳しいが…

(提供) アジア福祉教育財団難民事業本部

一方、彼らに対して同情的な経営者のいる企業も多く、特に経営者自身が海外生活を体験している場合は、親身になって相談相手になったり、日本語教育を行う事業所もある。

各定住促進センターの就職担当者の方の話では、円高不況等で雇用機会が減っている上に、難民の提出する雇用条件が年々高くなり、就職先を見つけるのがセンターを開所した当時に比べて難しくなっているという。

国際化への道

この2-3年アジア各地から日本に働きに来る、いわゆるアジア人労働者が急増している。彼らと難民たちの職場は競合する所も多く、より安い労働力の出現により難民への求人が減った所もあるという。在日韓国・朝鮮人や中国帰国者の問題が未解決のまま“国際化”はどんどん進んでいるようだ。

今回の取材で、日本人が行きたがらない職場に経営者が在日朝鮮人の会社が挙げられていたが、これは予想されていたこととはいえ、いささかショックであった。インドシナ難民の定住に日本語の力は欠かせないが、日本で生まれ、日本しか知らない在日朝鮮人の子弟が今なお就職差別を受けているのが現実だ。これはインドシナ難民の明日の問題だという人もいる。

しかし、定住難民の若い人や子どもたちに話を聞くと、「日本が好きだ、日本にずっといたい」という声を聞く。彼らはくったくがなく明るい。最初は学校でいじめられたこともあったようだが、今ではその完璧な日本語と腕力で日本の子どもたちを圧倒している。彼らの好きな日本が、大人になっても好きであるようにと願う。

定住6年目の独立

7月21日、コーノ製作所を訪問した。相鉄線かしわ台駅から徒歩5分、商店街のすぐ近くである。この事業所はラオス難民だったコーン・ティープさん自身が経営している。中に入ると畳10畳ほどのスペースに工作機械が2台置いてあった。

コーンさんは7年前に日本に来た。現在30歳で、家族は妻と子ども2人の4人だ。両親と他の6人の兄弟も健在で日本にいる。仕事はもう1人のラオス人と2人でやっているが、お父さんも時々手伝ってくれるという。

仕事の内容は見本製品の製造だ。テレビ、電話機、電気製品など何でも作る。見本を作って、設計者が「これはいける」と思ったら量産するのだそうだ。だから一見製品のように見えても中身はカラッポで使うことはできない。

コーンさんも現在の仕事に落ちつくまでに何回か転職している。まず大和定住促進センターの紹介でいすゞ系の車体工場に勤めた。従業員は3000人ぐらいだったという。定住難民のほとんどの就職先は従業員100人までの中小企業なので、彼は出だしから恵まれていた。と、思ったら給料が安くて半年ほどでやめてしまったという。

しかしよく聞いてみると、やめた原因は給料ばかりではなかったらしい。彼はその当時日本語がよくできなかったの、仕事の指示がわからずいつも怒られていたという。

「仕事はグループに分かれてするのですが、『今日はこれをしろ』と指示されても、どうしていいかわからないのです。自分は誰かがついていないと仕事ができなかったのです。寂しかったです。『これを磨け』といわれても、どこまで磨いたらいいのかわからないし。グループの責任者も、私だけに構ってはいられませんから。こちら辛いです、向こうも辛いですよね。センターの3カ月の日本語では通じないですよ」

「3カ月の勉強では挨拶ぐらいしかわかりません。工具の名前も、ハンマーとかドライバーぐらいならわかりますけど、ドリルとか珍しいものを持ってきてくれといわれると全然わからなくて、向こうも大変でしたよ」

コーンさんはここをやめ、再びセンターの紹介で

従業員80人ぐらいの機械を作っている会社に勤めた。この会社ではラオスで学んだ機械技術が役に立った。(コーンさんは機械技術の専門学校3年の時にラオスから逃げてきたという)給料も前の会社では8万円だったが、20万円にアップした。しかしそこも2年半ほどでやめた。

次の会社はトライアル工業といって、現在のコーノ製作所の親会社である。ここはセンターのクックをしていた工藤さんという人に勧められて入った。工藤さんはコーンさんがセンターに入所していた時からの友人で、その時はトライアル工業に働いていた。彼から「1,2年トライアル工業で働いてから独立してみないか」と誘われた。そのころはコーンさんも教会やJVCのボランティアに日本語を学び、かなり上達していた。自信がついてきたのだろうか、思いきってその誘いに乗ってみることにした。しかし給料は少し下がった。

結局3年ほどそこで働いて昨年6月に独立した。機械は退職金がわりに親会社からもらい、自分では場所代と工具代に100万円ほど用意した。

現在の仕事は原則として午前9時から午後5時まで働く。もちろん仕事が忙しい時は夜11時、12時まで働くこともあるし、休日出勤もある。むしろ親会社にいた時よりも労働時間は長くなったという。機械も工具も不十分なので、同じものを作るのに倍近く時間がかかってしまうそうだ。

こうしてコーンさんは独立して事業を営む難民の第一号になった。彼に続くような人はこれからも出てくるだろうか。

「やはり日本に来てまだ慣れないうちは、とても生活に不安を感じている人が多いですね。自分に能力がないと思いついてしまい、今日、明日の生活さえなんとかなればいいとあきらめてしまってるんです。余裕がないんですね」

さらにコーンさんはよい仕事につくためには、言葉ができなければだめだと強調する。

「まず言葉が大事ですね。というのは、どこの会社に面接に行っても、『不景気だから言葉ができないと使えないものにならない』といわれるんです。たと

インドシナ難民の日本定住

インドシナ難民はどのようなルートを通して定住に至るのか。今まで何回も本誌で取り上げたが、定住ということに絞りもう一度見ておきたい。

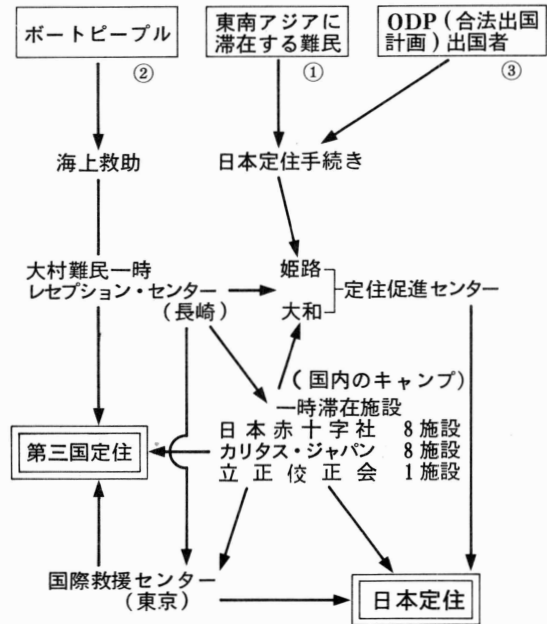
- ① 東南アジア各地の難民キャンプから定住促進センター（ラオス、カンブチア＜カンボジア＞人一大和、ベトナム人一姫路）に入所し、ここで3カ月の日本語と社会適応訓練を受けてから定住する。
- ② 日本に上陸したボート・ピープル（ベトナム難民）は大村レセプションセンターにいったん入所後、日本定住希望者は姫路定住促進センターで各種訓練を受けて定住する。また第三国定住希望者で受け入れ先のすぐに見つからない者は、国内のキャンプ地、または国際救援センターに入所する。しかし第三国受け入れがなかなか決まらず、本人が定住を希望すれば、国内キャンプ地や国際救援センターから定住する。



職場の仲間たちと（提供）アジア福祉教育財団難民事業本部

- ③ ベトナムの元留学生または定住難民などは家族を呼び寄せることができる。それらの家族は直接定住できるが、定住促進センターに入所することもできる。（合法出国計画—O.D.P）

インドシナ難民の日本定住



UNHCR 『レフュジーズ』第1号より

え技術がなくても見習いで使ってくれるんですが、言葉ができないと、日本人の方がいいということになるんです。無理に使ってくれるところは給料が安いです。みんな、うちに相談に来るんですが難しいですね」

〈インタビューを終えて〉

コーンさんの場合、自分の仕事の現状に甘んじることなく、転職を着実に自分のプラスにしている。日本語の力が職場の待遇に大きく関わることを早くから認識し、日本語での会話を学ぶことの多い、小さな工場に転職した。さらに日本語家庭教師のボランティアたちともつきあい、日本語にみがきをかけた。

生活に余裕ができてでもそれに満足せず、さらに積極的に日本で生きていく道を開拓していった。仕事についてアドバイスをしてくれる、工藤さんという友人を得たことも大きかった。異った習慣を持ち、

外国人をなかなか受け入れない社会で思い切ったことをするには、気心の知れた日本人の友人を持つことが必要だと、コーンさんは日本社会での自分の可能性を冷静に見ている。

コーンさんの独立が本当に成功かどうかはもう数年しないと見えてこないかもしれない。ただこれだけはいえると思う。定住難民の中から日本社会の中に自分を投げ出して、積極的に自分の道を切り拓いている人たちがいる。これはすべての定住難民の人たちの今後の生活の希望につながると思う。日本社会の中で孤立し、ただじっとしている人が多い中で、自分の持っている技術、可能性を最大限に生かしてがんばる人が出てくれば、自ずと他の人も続くだろう。もちろん、日本社会の偏見や閉鎖性ゆえに、行く手に困難は多いと思う。積極的にわが道を行くコーン・ティープさんの今後の成功を祈りたい。

（大満邦彦）

取材上のトラブルから見えてきたもの

JR 横浜線の十日市場にあるM病院は、電車からひと目でわかるほどの大きな病院である。ここで働く人は130名、そのうちの1人が定住難民で、かつては2人働いていた。

この病院における定住難民の雇用は、特に病院側からの要望ではなく、そこに務めている医師の紹介によるものであった。Gさんはここで7年間働いている。半年前までは奥さんもいっしょだったが、疲れたらしく今はやめている。

上司は「彼は日本語も相当なもので、特に難民とか外国人という意識はない」と言う。また「彼はうちの病院の顔ですよ。いい意味でも悪い意味でも」とも言った。彼の仕事は、以前は職員や患者を送る送迎バスを運転し、午後はレントゲンの助手をしていた。しかし運転は事故が多かったため今ではそちらの方はやめてしまった。所属自体は総務課だが、手先が器用で機械にも強いので、ちょっとした修理などは彼が引受けているという。

レントゲンの助手といってもレントゲン技師とはまったく異なり、給料もかなり低く、勤続7年でもいろいろな手当を含めて19万円弱である。だがここでは同じ資格なら日本人とそうでない者の差はないそうだ。

この病院が配慮しているのは、雇用促進住宅の費用ぐらいなものである。ほかは定住難民だからといって特別なことはしていない。

労働環境は、と言っても病院だから悪いはずがない。日本の定住難民の約7割が製造業に就いていて、中小企業の町工場でおととまみれながら働くケースが多いことを思えば、この病院の環境は恵まれていると言えよう。この病院に務める人の平均勤続年数は平均4～5年という。看護婦が全体の8割近くを占め、病院自体3年前に移転したのでそれらを考慮すると上のような数字になるだろう。定住難民が1人しかいないので単純に比較することはできないが、それでも勤続7年は長いほうだ。初めての勤務先はずっと勤めている難民はほとんどいない。

問題がまったくないわけではない。先に「彼はうちの病院の……悪い意味でも顔」といったが、その理由は彼が外国人だからという性質のものではないようだ。「声が大きくて、ずけずけものを言う」性

格が好かれるかどうかというような、日本人の間でもある問題である。このようなことが果たして特別な問題かどうかの区別はつけにくい。

インタビューは順調にいっているかのようにみえた。しかしどこからか電話がかかってきて、担当者へのインタビューを早く切りあげざるをえなくなってしまった。そこで一緒に働いているレントゲン技師や助手の人に話をうかがわせてもらうことになった。ここまでは普通のインタビューだったが……

「JVCの人がなんでここにいるの?」と、レントゲンの作業を見ている私の後ろからこのような声があった。一瞬何が起こったのかわからなかったが、よくみると、その人が定住難民本人であった。事情を説明すると本人は理解したようではあるが、いい気分でないの是一目でわかった。そのうち彼の同僚からも「なんの権利があってこんなことをやっているのか」と責められたり、非常に気まずい雰囲気になってしまった。

彼はセンターの模範卒業生としてマスコミ等の取材も多く「なぜ自分ばかり取材されるのか」と迷惑そうだった。「そっとしておいてほしい」、そういう気もちもあるに違いない。それを考慮しなかったのはうかつだった。また今回の取材は彼も納得していたものと思っていたが、それを確認しなかったのは私たちの落度である。

しかし、なぜ彼は取材をいやがるのだろうか。単なる“話題”として彼を取り上げ、それ以上深くかわろうとしないマスコミに腹をたてているのだろうか。それともJVCに対して何か不満があるのだろうか。難民の人の友人のつもりで取材に来たが、それは私の思い込みだったらしい。(正木幹生)



Gさんの勤めている病院

やっぱり日本人の方が楽です

「難民をやとった理由ですか？ 正直なことを言うと、日本人が採用できなかったからです。ゴ・テ・ホンとグエン・フン・ホワンの2人が入社したのは、昭和56年の8月のことなんですが、そのころは、好景気で人手がたりなかったんです。その年の正月には、従業員募集の新聞広告を出したのですが、思うように集まりませんでね」

と話すのは、ムトー電気の総務部長のM氏。同社は、東京の渋谷から西南西に伸びる田園都市線で30分余り、青葉台という駅でおりて、バスで10分。横浜市といっても西北のはずれ、のんびりした田園地帯にある。

「センターの内藤所長からお話があったのですが…2人が最初に来たころは、本当に大変でしたよ。

彼らはセンターを出て1度別の会社に行ったとかで、補助金も付かなかったし……。

ホンもホワンも、ゆっくり話してやれば、かなり分かったのですが、日本語がまだまだでしてね。約1年あまり、2人に日本語を教えました。毎日、仕事が終わって1～2時間、別の従業員から小学校低学年の国語の教科書を借りましてね。

変な誤解を生じさせたくなかったし、私自身も外国に住んでいたので、言葉が通じないつらさはよく分かってましたから。2人とも性格がよく頑張ってくれましたから、1年あまりで、ほとんど不自由なく話せるようになりました」

両者の努力のかいあって、2人の日本での生活は安定してきた。とくにホワン氏は、ベトナムに残してきた許婚（いいなずけ）を脱出させ、結婚式をあげるまでになった。盛大な式をあげ、それまでいた会社の寮を出て一家を構えたのは、就職して3年目、昭和59年9月のことである。一方のホン氏は6年あまり寮生活を続けたが、この7月家族の住むオーストラリアへ出国した。理由は家族愛だけで、仕事への不満ではなかった、とホワン氏は言う。

「この2人の紹介で、もう1人難民を雇いました。彼はこの2人と同じ舟で逃げたといっていました…。多少狂暴なところがありまして…。社内で些細なことから3回ほど暴力事件を起こしたのでやめさせました。2人にも異論はなかったはずです。そのころ、大和のセンターにはラオス、カンボジア難民しか入

所しなくなり、違う国の人は同じ職場に入れないうがいいというので、難民の採用はなくなりました。

そのうちに、不景気になりましてね。どちらかという、人手が余るようになって。欠員ができてても補充しない状態で……」

ムトー電気は工業用の送風機のメーカーで、資本金3000万円、従業員は約60名。最近の製造業の低迷と、円高による工業プラント輸出の不振のダブルパンチを受けて、景気は悪いとか。

ホワン氏の月収も20万円を切り、35歳の家族もちとしては決してよくはない。しかし「日本人とまったく同一賃金です」とM部長は強調している。

最後に、「また人が必要になったら、難民を雇いますか？」ときいてみた。

「いや、たぶん雇わないでしょうね。今は、日本人の求職者も多いですし…。やっぱり、難民を雇うというのは大変ですから。同じ給料を払うなら、日本人のほうがラクです」

〈インタビューを終えて〉

この会社、あるいは総務部長氏は、正直で、いい人なんだ、これが現実なんだと強く感じた。

現在、センターでの3カ月の日本語教育がすむと、すぐに就職を斡旋している。センターを出て最初に入った会社には1月1万9700円、半年間の補助がつくが、日本人と同一年齢、同一賃金を求められる。1年たったら日本人と同等に働けるだろうか？ なにか面倒は？ こう考えると、できれば難民を避けたいという、企業の“本音”は理解できる（社会的責任の追求はおいとく…。特に求職者の多い大企業、優良企業ほど、そうだろう。

そうなると、難民に対する求人とは2種類ということになる。ひとつは、仕事の割に収入が少なく、日本人もあまり好まない職（低水準であっても日本人とは同一賃金）。もうひとつは、好況で恒常的に人材が不足している業種。

しかし、現在好況なのは、第三次産業、つまりサービス業である。この仕事では日本語がある程度話せることが最低の条件になる。それなのに、日本語の教育期間はわずか3カ月…。困難なはずだ。

(A. G)

もう1つの就職最前線

大学生の入社シーズンを迎え、街のあちこちでリクルート・スーツを着た学生たちとすれ違う。秋の訪れを感じさせるが、一方で、そのような季節と関係なく就職問題に頭を悩ませている人々がいる。難民定住促進センターの職員の方々だ。

外国人を受け入れることに慣れていない日本社会とのあつれきや、円高不況の波などハードルは高く限らない。このような最前線で働く方々に現在の難民の就職状況と問題点についてお話をうかがった。

大和定住促進センター

内藤所長の話

難民の就職状況ですが、彼らの約9割は製造業に勤務しております。大和市の周辺は輸出関連企業が多いのですが、アジア人労働者が増えていることもあってか、難民への求人は減ってきました。屋外や建設の仕事ならありますが、難民は希望しません。

先に就職した難民の評判が一部であり良くないのも頭の痛いことです。転職が多いので企業が雇いたがらないのです。それらの雇用主は中小企業が多く、社長さん同士はお互いに友人なので、一カ所での評判が悪いと連鎖反応を起こしてしまいます。

転職の理由は自分からのものがほとんどです。例えば対人関係が悪いとか、雰囲気合わないとか等で、一般に楽しくて収入の多いところを求める傾向があります。難民の言うことがもっともだったり、雇用者にも納得のいく形でやめた場合は、再度センターで斡旋します。それ以外は職安に行ってもらっています。

難民の雇用条件が特に悪いとは思いません。当センターが斡旋するケースでは日本人と比べても同一労働同一資金ですし、雇用者側が住居を借り上げたり、家財道具の一部まで面倒を見てもらうなど、日本人より厚遇されていると思います。しかし最近では難民の求める雇用条件が高すぎ、納得させる迄に相当の時間と労力を割かねばならないケースも増えております。祖国やタイのキャンプに残っている親族や知人への送金や、キャンプ長期滞在による定住の遅れの焦りが背景にあるのだと思います。

話は変わりますが、大企業はもちろん雇用条件はいいのですが、まず難民は採用しませんね。新学卒の日本人を選抜採用できますし、あえて日本の習慣に不馴れで日本語も不自由な難民を雇用する必要は、

大企業側にはないのです。法律で難民などの雇用わくを定めなければ実現は困難でしょう。しかしそのような法律を制定し、大企業に難民雇用を義務付けるのは、私個人は賛成ではありません。私は難民が大企業のお荷物になることを怖れます。憐れみを持って受け入れられたのでは、結局お荷物になってしまいます。それでは彼らに真の幸福をもたらすことにならないからです。

外国人採用面での大企業の国際化は少しずつゆっくりではあるが着実に前進しており、また難民の側にも大企業で十分適用する人材が徐々に育って来ております。この問題は時が解決してくれると思います。アメリカのバンカメが数年前にベトナム人を40人雇用したことがあるそうですが、それなりの裏付けがあつてのことで、無理強いをすることは、日本では避けるべきだと私は思います。

より多くの難民が日本社会に適応し、幸せになる上での問題は難民を雇用する企業の大きさにあるのではないのです。例えばこういうことがありました。社長自身はロータリークラブの会員で難民問題にも理解があり、彼らにも同情的でした。しかし現場の、毎日難民の指導に当る上司はそうではなく、彼との関係がこじれて、結局その難民はやめてしまったのです。一般に大企業は組織が大きく小回りがきかないので、いったん配属を決定したらなかなか配置替えができないのと、社長自体が両人の関係を日々見守り種々の手を打つことが出来ないのが通常であり、結局それが定着指導にマイナスとなったのです。

当センター斡旋の話に限りますが、雇用主には本当に良くケアしていただいております。とても私たちに協力的な雇用主が多いと言えます。不良雇用主は、ほとんどいないと断言できます。

小平次長の話（就職相談員）

難民の希望する業種は製造業がほとんどです。そのうちカンボジア人が比較的敬遠する業種は、溶接、塗装、屋外作業、交代制勤務などです。難民の職業選択は民族によってもいささか差はあって、カンボジア人は前記のように溶接も塗装も好まないが、ラオス人はこれらの職種にそれ程抵抗がない模様です。そのかわりラオス人はプレスを嫌う傾向が一部にあります。

上記の理由で職安からもらってくる求人も金属製品製造業を主体としているのです。しかも職安求人の中なかでも学歴、資格が不問のところでないで利用

できないのです。

3年ほど前から難民を採用する会社は少なくなっています。難民に関しての悪い噂が広がったためか、電話での求人開拓の際、インドシナ難民といっただけで電話を切る会社もあります。プィ・ムウン事件については、あの直後には一たん決まりかけた就職がだめになるなどの影響がありましたが、今はそのような傾向はありません。

今いる難民の就職はむしろ先に就職した者にかかってきます。先輩の評判が良ければ、再度難民を採用しようという会社もあります。その場合トラブルを避けるため、原則としては同国人しか採らないのですが、中にはカンボジア、ベトナム、ラオスと3カ国の難民を雇用している会社もあります。

難民を雇用する場合、住居等は雇用者が負担するので大変だと思います。特に独身女性の場合は台所、風呂つきでないのだめなので、1人だけでは雇ってくれません。また独身寮を持っているような会社は難民を雇用する意志が薄弱のようです。

電話での求人開拓の場合、相手方の対応でどんな会社かわかりますね。私たちは面接の時に彼らに同行しますが、作業環境がひどかったり、雇用主との関係がうまく行きそうもないと判断した所は、他の条件がどんなに良くても勧めていません。

姫路定住促進センター

松原次長の話

昨年の求人状況はととても厳しかったです。今年の7月ごろから若干上向いてきましたが、姫路周辺は重厚長大産業といいますが、鉄鋼、造船やその関連産業が中心で、不況は深刻です。難民の就職先は皮革やゴルフ用品製造などの地場産業が主となっています。皮革は輸入した生の牛皮の肉を削り取るなど臭いがひどく、日本人のやりたがらない仕事です。しかしこれは給料は少しいいようです。彼らの就職の基準は給料ですね。お互いに情報交換して、少しでも条件がいいと移っていきます。

以前に岡山の町営果樹園が、町ぐるみで難民を受け入れたいといってきたことがありましたが、誰も応じる者はいませんでした。島根の方からもそんな話がありましたがだめでしたね。農業には行きたがらないのですよ。大都市志向といいますが、大阪、神戸などの周辺に就職する者が多いようです。仲間がいる所の方がいいかと思えばそうでもなく、ベトナム人のいない所の方が親切にされるといって、あ

えてベトナム人の少ない所を選ぶ者もいます。

難民たちは初期に入所した者に比べ、キャンプ生活が長いせいか、やる気のない者が増えています。それにボート・ピープルの場合、アメリカやオーストラリアが受け入れてくれないのでしかたなく日本に来た者もいて、日本語の授業にも身が入らず困っています。ただでさえ日本語によるトラブルが多いのですから。

このセンターで日本語を勉強できるのは3カ月です。もちろん授業は標準語ですから、彼らは実社会に出て関西弁にとまどいます。3カ月ではとても関西弁までは教えられません。センターでは、退所した者に対しても、日曜日の午後2時から2時間、日本語の補講をしています。これは姫路在住の日本語教師がボランティアで行っています。そのほかに難民を雇い入れた企業が、独自で日本語を教えている場合もあります。

定住促進センターは難民たちが定住するまでの責任を負うのですが、実際はそうはいきません。難民相談員が職場訪問を行っています。雇用主からの苦情で出かけることもあります。定期的にまわっています。しかし中には「手を休めるから」と、相談員が行くことを迷惑がる会社もあります。

難民の就職が困難なのは住居を雇用主が用意しなければならぬからです。民間アパートを社長が借りますが、保証金に10カ月分かかるのです。契約期間中にそこを出ていけば、違約金として2カ月分取られます。どうしても定着率の悪い難民には及び腰になります。

センターが開所した直後の1980～81年は、同情ともの珍しさで求人もかなりあったのですが、日本人から見ると常識はずれととられる行動をしたり、親切にされてあたり前というような態度があって、人気は落ちました。

井上所長の話

現在の問題は生活指導をどうやっていくかです。競争の激しい日本社会から落ちこぼれていく難民もいます。そのような自活できない、日本社会になじめない人々にどう対処していくか。また外国で自立していくには大変な障害がありますが、それを克服できない人にはどうしたらいいのか。これは決して善意で解決するものでなく、機構、組織的な問題です。資金は十分にあると思いますが、今早急に考えなければならない問題です。

T/Eのお詫びに関する所感

齋藤 誠

日本の対応が遅れたのは国民の責任

ずいぶん昔のことと思われると同時に、つい昨日のことのようにも思えるインドシナ戦争の終結。その結果、解放戦争といわれながら、一般大衆の生活はむしろ束縛されることになった。やがてその人たちは自由を求めて難民となり、流民となり祖国を離れた。

生まれ育った祖国を捨てるということは、いったいどういうことなのか。我々には想像もできない。故郷を捨て、何日も何十日も、いや何カ月も歩く。有刺鉄線に囲まれた難民キャンプでは自由を得るために何カ月も、いや何年もひたすら待つ。想像を絶する精神状態であったろう。国連と西側諸国からの援助によって数多くの人命が救われた。日本もそのうちの一国であった。しかし悲しいかな、国家形態が異なるというか、単一民族国家だからというのか、欧米諸国のす早い援助に比べ、はるかに遅れをとってしまった。

これは政府というより、むしろ個々の日本人の考え方に問題があるのではないかと思う。難民、流民、移民の問題には無関心で、他人事と思っているのが大多数であろう。東南アジアの人たちが日本に移り住むなどということはとうてい考えられず、来てはしくないというのが本音と思われる。

小舟で大洋に乗り出し、やっとの思いでたどりついた日本。そこには暖かく迎えてくれる人は皆無に等しかった。宗教家が頭を下げて収容施設を探しても、近隣の日本人は近くにその様な施設ができるのは迷惑だと、すべて反対した。いくつかの宗教団体と日赤の努力によって数カ所の施設ができたのは、それからしばらく経ってからと記憶している。

小さな企業しか難民を雇わない

その就職であるが、就職する側、受け入れ側の双方がどれだけ理解しあっていたのか、今になって問題が種々発生している。それは言葉、住居、生活慣習の違いという以前の問題ではないかと、このごろは思っている。

キャンプの難民たちは日本の社会を知らない。いや知らされていない。彼らは日本に対してアジアの先進工業国のイメージしか持っていない。彼らが職場での労働条件の厳しさを知るのは、現実に日本に来てからだ。

政府は外圧によって少しずつ難民の定住わくを広げた。それにともない国内の法制はそれなりに整えられたが、日本人ひとりひとは彼らを迎え入れることにそれほど積極的ではなかった。社会の競争も厳しい。彼らがいたずらに日本に期待し、後で裏切られないためには、日本のインタビューチームが面接する際に、もっときっちりそのことを伝えるべきだと思う。現在職場で起きているいくつかのトラブルは、そんなことが原因の場合もあるからだ。

就職する場はすべて中小企業、または零細企業である。一部の人たちによれば安い労働力の確保とか、最低の労働条件との批判がある。しかし、彼らに職場を提供しているのはこのような小企業なのだ。私はこのような企業経営者は、あくまでも善意を持って受け入れたものと信じている。なぜなら何人かの経営者に会って話を聞いたところによると、「彼らを採用するより、近所の主婦をパートで採用した方がはるかに効率が良い」という。しかし、「長く勤めて、早く技術を覚えて会社の戦力になってほしい」とつけ加えるのだ。そこで働く日本人も小さな会社なので一生懸命働いている。中には不景気の波をかぶり倒産する会社もあるだろう。倒産したくて倒産するわけではない。倒産すればそこで働く難民の人たちばかりでなく、日本人やその家族まで路頭に迷うことになる。その会社が良いとか悪いとかの問題ではないと思う。賃金も安く、待遇も悪かったかもしれない。しかし会社自体が不当にそうしていたのではない。それ以上の条件を出したくても出せなかったのだ。

なぜ就職先が中小企業しかないのか。それは小さな町工場の経営者の方が、大企業のそれよりも人情とか同情の心を持っているからではないだろうか。

政府の政策を批判するのは簡単だ。しかしそれ以上に国民1人1人が、難民の人たちへの理解を深めてほしいと思うのである。

齋藤 誠さんは、1966年青年海外協力隊でラオスに渡る。任期終了後は現地の建設会社に就職し、水道関係の仕事に従事。政変後1977年に帰国。インドシナ難民が日本に来てからは、彼らの良き相談相手として慕われている。

職場は摩擦がいっぱい

大石 百代

新しい研修生

私が勤務しているクリニックに、イラン人の M・サファリ氏が研修生として入って来たのは昨年10月であった。

「彼は日本に来て1年余り某大学で日本語を学び、現在は大学の医学部を目ざし予備校に通っているため、主に午前中のみ勤める」

これが主任を通して知らされた彼のプロフィールであった。年齢は25～26歳。中肉中背でいつもスーツ（白か黒のみ）を着て、アタッシュ・ケースを持っている。彼はこのスタイルがベストと思っているため、ズボンのすそが切れていようと着用し続けている。自分が絶対正しい人であると信じているためか、たいしたことではないがトラブルが多い。彼自身は日本人やその生活に入ろうとして努力しているつもりでも、彼の思考や言動には我々日本人にはとまどうことが多いからだと思われる。

彼は院長の知人に連れられてきた。そしてその翌日から研修生となったので、我々受け入れ側の準備は何もなかった。それにこのクリニックは、西洋医学でも東洋医学でもない自然食（主に玄米と野菜を中心とし、肉や乳製品を取らない）による、いわゆる食事療法であるため、医学部をめざす人が参考となるような研究は何もしていないのである。結局、患者さんの身長、体重測定等の基本的な検査をしてもらうことになった。

私が「医学部を受けたいなら、西洋医学の病院の方が参考になるのではないかと」と問うと、「私は西洋医学は大嫌いです。ここの病院のやり方が自然です。ですから私はここで学びたいんです」と言う。その気持は理解できるが、大学の医学部は一般に西洋医学が基準となっているから……とそんな意味を含めて話したのだが、まったく理解してもらえず、逆に「あなたはここの方法が嫌いなんですか」と大きな目でニラまれた。

彼の目標は東大の医学部である。イギリスの高校を出てからイランに戻り、テヘランの大学で哲学を

学んだ。国のために医者になるつもりで日本に来たという。なぜ日本という国を選んだのか。アメリカやヨーロッパの話になると、「1日たりともそれらの国にはいたくない」と非難し、あとは何を言っているのかわからなくなる。兵役を受けたことはないらしい。ひたすら持論をまくしたてるので、最近では彼の話を聞く人も限られてきた。しかし働くことより勉強の方が好きだというだけあって、患者が途切れているわずかの間でも、三種類ぐらいの辞書や参考書を広げてがんばっている。

「すみません」

この夏、登山を目的とする研修旅行があり、宿泊先の貸別荘に、一台のテレビが置いてあった。皆は野球を見ていたが、彼はいつも見ている教育番組に切りかえるように大声を上げていた。誰もとりあわない。「ここでもやっているかどうかわからないが、一度まわしてやれ」との上司の声。やはり番組はやっていなかった。「どうしてやっていないんだ?!」とまた騒ぐ。誰からも返事はもらえなかった。

翌日は山登りだった。頂上から下山する時になって、彼がいないので大騒ぎになった。しばらくすると、すでに下って途中の山小屋にいることがわかった。昨夜のこともあって、彼には誰もが腹をたてていた。

「まったく、外人だと思って皆甘やかし過ぎるのよ。主任はもっと厳しくしなくてはだめよ!」

「主任も彼が仕事でミスする時は、かなりきつく注意しているようですが、素直に謝った所は見ただことではないですね」

山小屋まで降りると、すでに誰かに注意されていたのか、彼は「私は下に降りるようにいわれたからそうしただけだ」と譲らない。陰で「あれじゃあ、戦争はなかなか終わらないだろうな」という声が聞こえた。

団体行動で他人に迷惑をかけた場合、日本人ならまず「すみません」という言葉がでる。この言葉には、たとえ相手の意見に同意できなくても、協調しようという気持が含まれている。しかし彼からはそのような言葉を聞くことはできなかった。

彼が「すみません」という時は遅刻した時である。「すみません」を連発し、その言葉さえ使えば許されると思っているので、また皆の反感を買うことになってしまう。何かがずれている、と思う。

カンボジア難民殺人事件の背景——定住難民の職場不適応

弁護士(ブィ・ムン弁護士団) 佐藤 安信

定住難民の職場

仕事は、およそあらゆる人間の生活の基盤です。収入の道であり、基本的な人間関係の場であり、さらにまた生きがいを見出す場でもあるからです。したがって、その仕事の間である職場は、難民の定住においても最も大切な場といえるでしょう。

ところが、この職場になじめないために苦しんでいる定住者は少なくありません。言葉が十分通じないばかりか、文化、伝統の違い等によって、日本人、定住者双方に誤解と無理解が生じやすい為でしょう。しかも定住者にあてがわれる職場のほとんどは、零細な中小企業であって、経済的にも時間的にも余裕のないのが普通だからです。

1985年の上智大学のインドシナ難民定住状況の調査によれば、受け入れ企業は、従業員100人以下の零細事業所が全体の65.4%で、1000人以上の大企業は、元留学生のような特殊なケースを除き皆無とのこと。また、定住促進センターの斡旋した職場を定住者の約6割が定着できず、やめてしまったことも注目されます*。

本年2月に起きた、定住カンボジア人の妻子4人殺害事件は、各方面に様々な衝撃を与えました。現在まで裁判で明らかになった事実に基づいて、被告人ブィ・ムンさんの辿った軌跡を追って、定住者一般の抱えている問題の深刻さを見てみましょう。

ブィ・ムンさんを追いつめたもの

ブィさんは、85年8月、センター生活4カ月で、センターの斡旋したT工業に就職しました。ここは自動車部品のプレス板金加工、金型製造を業とする従業員15名の小企業です。彼がここに決めた理由は、先にカンボジアの定住者2人が働いていたからです。

ブィさんは、比較的危険の少ないスポット溶接をしていました。二人のカンボジア人とは親しくしていたようですが、無口でおとなしい性格から、日本人の同僚に自分からとけ込んで行くことはできなかったようです。仕事はまじめで、月15万円程を得ていましたが翌年3月頃、2人のカンボジア人が会社をやめてしまったからは、話し相手もなくなり、不安が募ったようです。

つまり、理解しあえる仲間がいなくなって寂しさが募っていたところ、人手不足で危険なプレス作業もやるように言われたのです。2人のカンボジア人がやめたのは、プレス作業員が指を切断する事故が相次いだためだったようで、ブィさんも危険だから断ったのです。このため同僚からは白い目で見られているように感じていました。ちょうどその頃です。工場の前に止めておいたブィさんの自転車のタイヤの空気が抜かれ、弁当箱がどぶに投げ捨てられていたのです。

こうした職場でのストレスでイライラしていた頃の5月30日、自転車で帰宅中、路上で接触した女性を殴ってけがを負わせてしまったのです。ブィさんは何度も謝ったのに、「バカ」と罵られたのでカッとなって殴ったと言います。しかし被害者の父は頭から強姦未遂と決めつけ、示談交渉は難行します。事件を知った同胞は彼を避けるようになり、妻も彼を責め、会社でも心ないうわさが広がるのです。

9月、会社の都合で休日出勤を命じられましたが、会社の不手際で事前にブィさんに伝わってなかったため、社長と争いになり、これを機に別の会社に移りました。事件は傷害事件ということで示談も成立したのですが、その後も警察、検察の呼び出し、罰金の処分を受けたこと、被害者側の追及が執拗だったことから、なぜか自分は北海道に送られ、一家離散となるかもしれないと脅え続けたのです。

こうして精神的に不安定となり、精神病院で、被害妄想性の分裂病を疑われ、第二の会社も長続きせず、妻の愛想づかしで絶望し、突発的のヒステリー状態で一種の心中をはかったように思われるのです。

ブィさんが精神的に弱かったことは否定できないでしょうが、この事件を通じて、私たちは、定住者が職場で抱えている問題は、経済的な面以上に、人間関係や精神面であることを理解すべきでしょう。それでなくても劣等感に苛まれ、差別や侮辱されることに敏感な彼らを、日本人の価値観で判断し、接することの危険を知るべきでしょう。

現在、ブィさんは小田原拘置支所に拘留中ですが、原則として日本語以外での面接は許されていません。これもまた悲しい現実です。

*昭和60年の外務省委託による日本国際社会事業団のインドシナ難民定住実態調査報告参照

NGOを訪ねて カリタス・ジャパン

〒162 東京都新宿区揚場町20-5
BM 飯田橋ビル5階
tel 03(267)7281

飯田橋の駅から歩いて3分、JVCの事務所と同じようなビルの5階にカリタス・ジャパン^註がある。JVCとオフィスのスペースは同じくらいだが、こちらの方がかなりきれいだ。そこの応接間で、難民関係に携わっているシスターの田中さんにカリタス・ジャパンの国内活動について聞いてみた。

カリタス・ジャパンの活動は海外援助と国内援助と大きく二つに分けられる。海外援助は、直接人をアフリカなどに送ることはしていない。ソマリアならカリタス・ソマリア、パキスタンならカリタス・パキスタンというように現地のカリタスを通じて援助している。

国内の方は福祉全般にわたって行っているが、その中の1つに定住難民への支援がある。

活動資金の規模は国内援助が約4000万円、海外援助が約1億円(1986年)。そのほとんどは一般の人々の寄付によってまかなわれている。ここ数年はジャパンタイムスからも500万~1000万円の寄付を受けている。資金が足りなくなった場合、各教会の地区で募金のキャンペーンをしたり、海外のカリタスから助けてもらうが、カリタス・ジャパンが組織として行うことはないらしい。

カリタスは「必要にせまられて」難民救援に取り組むようになり、現在は120名の難民を受け入れている。今年になっても3月に6名、4月に3名受け入れた。難民を受け入れる施設は関東では、あかつきの村(群馬県前橋)、烏山カトリック教会(栃木県)、他に新潟、兵庫、長崎、大分、宮崎など全国に8カ所ある。どの施設も街の中心から少し離れたところにあるが、これは難民の就職のためで、大都市では仕事に就きにくいという理由からだ。周りの人との人間関係においてもそのような場所のほうが良いと言う。

カリタスの施設は、国際救援センターのように柵で囲っているものでもなく、門限があるわけでもな

い。難民も人間であり、また罰を犯した者でもない人を囲いで囲うのがいいか悪いかは自ずとわかる。このようなことを田中さんは言っていたが、それには現在の難民の扱われ方についての不満が表われていた。

難民に何か起こった場合、難民のほうからカリタスのほうにやって来る。それだけカリタスが信頼されている証拠である。寝泊りするところがない人がいれば教会をその場に提供する。彼らを心から信じて接していくうちに信頼関係ができてくるという。

カリタス事務局のスタッフは5名。他に週1、2回ぐらい手伝いに来るボランティアが数名いる。かなり少ない感じがするが、各施設が活動の中心なので、事務局にはあまり人が必要でないのかもしれない。ではそれぞれの施設ではどのくらいのボランティアがいるのか聞いたところ、「こちらでは握んでない」との返事だった。そして「数字が重要なのではなく、難民が満足しているかどうか重要」と言われてしまった。あかつきの村では群馬大学の学生がボランティアとして来ているが、このように地域に密着したボランティアを求めているようだ。カリタスの姿勢としては、「難民に関するお手伝いをしたい」などの問い合わせがあると、まずその人の周辺にある施設を紹介している。まずそこに行ってもらって、その人ができることをしてもらおう。東京に住んでいて近くに施設がない場合はカリタス以外の、例えば品川の国際救援センターなどを紹介している。

カリタス・ジャパンは宗教法人であり、当然のことながらその活動はキリストの教えに基づいている。田中さんの「難民の人に幸福になってもらいたい」という平凡な言葉にも、強い信念と力強さを感じる。このような活動を長く支えるためには、その人の核となる何かが必要だ。

取材の終りに「目立つことよりも、目立たないことをしっかりやる必要がある。」と言われた。最近はどうような活動においても目にみえるもの、あるいは客観的な数字で表わせるものを追い求める傾向にある。しかしそれが目的なのではない。それは日常の活動のあくまでも結果であり、1つの目安にしかすぎない。ともに生きる姿勢こそが大事だというのだろう。ひょっとしたら私たちもそうになっているかもしれない。田中さん個人の言葉ではあるが、このような人がいるカリタス・ジャパンに、宗教にとらわれず、訪ねてみるのもいいかもしれない。

(正木幹生)

注) カリタスとは、カトリック教会のローマ教皇庁管轄下にある国際的救援機関で、世界126カ国(共産国含む)にある。

在日の意味を考える

JVCでは、今年の2月から3回にわたって「在日外国人と私たち」という統一テーマのもとに学習会を行ってきました。今回は、その一連の学習会を締め括る意味から行われた討論会の模様を報告したいと思います。

●学習会の趣旨

JVCでは昨年7月以来、第三世界と私たちの構造的な事実関係を知ろうという目的から、様々な有識者を講師にお願いして学習会を進めてきました。そうした学習会は非常に多様なテーマに及んでおり、第三世界と私たち日本人との関係が私たちの生活のあらゆる断面で複雑な結びつきを持っていて、しかもそれらは必ずしも好ましい関係ばかりではないということが、学習会の回を追うごとに分かってきました。

こうした事実を踏まえた上で、私たちひとりひとりが具体的な行動に結び付けていけるような学習会を展開していきたいという思いから、JVCでは学習会のやり方そのものにも工夫をこらさねばならないと考えました。最初に試みたのが「在日外国人と私たち」という統一テーマによる学習会と、それをまとめる討論会であったわけです。

●テーマの趣旨

第三世界と私たちの関係を考える上で、何よりも初めに認識しておかなければならないのが「在日外国人と私たち」の関係だと考えました。世界規模の経済力を背景に、今ほど日本の『国際化』が話題になっている時代はないと思います。そうした『国際化』は日本人がビジネスで海外に進出することや、欧米人が日本でビジネスを行うことばかりを意味して、日本人自身が『国際化』するとはどういうことなのかという問題の捉え方がなされていないように思えてなりません。日本人自身の『国際化』とは、それではいったい何なのか。それは、日本社会の中に生活する在日の人たちと私たちの関係の再認識だと考えました。在日する人たちの大半がアジア諸国から、つまり第三世界から来た人たちだということで、日本人が第三世界との関わりの中でどのように



神奈川県国際交流協会の談話室で

『国際化』をして行くのかを考えるための「踏み絵」のようなテーマだと考えたのです。

なお、今回の討論会にいたる3回の学習会は以下のとおり行われました。

(第1回)「在日外国人と私たち」

1987年2月28日

講師：愛知県立大学教授 田中 宏

(第2回)「単一民族社会イデオロギーからの解放
—在日外国人と私たち」

1987年3月28日

講師：東京立大学教授 小沢有作

(第3回)「たたかうじゃばゆきさん」

1987年5月2日

講師：記録映画作家 山谷哲夫

●討論会報告

今回の討論会は、参加者による意見交換と同時に、実際に日本に住んでいる外国人の方々の意見も聞きたいということで、3人の方々に討論会に参加していただきました。簡単に紹介します。

○デイブ・バスカビルさん (アメリカ人)

シーコア・インターナショナル・コーポレーション副社長、JVC執行委員。宣教師として初来日して以来20年以上日本に滞在している。

○アイネス・バスカビルさん (アメリカ人)

デイブ・バスカビルさんの夫人。JVCボランティアとして活躍中。

○スワイ・レンさん (カンパチア人)

留学生として初来日して以来約7年、現在は日

本に定住。会社員。奥さんは町田でレストラン「アンコール・トム」を経営。

討論会は約3時間にわたって進められました。そのすべてをここで報告することは紙面の都合からできませんので、討論会の中で出た主な意見を紹介していきたいと思います。

[みんなでやれば恐くない]

日本人一般に共通した考え方として「みんなでやれば恐くない」というのがあるように思われる。例えば単一民族社会というような本当は事実とは異なることでも、社会の大方の意見であれば事実の正否はともかく多数意見を自分に言い聞かせて信じ込んでしまうというような傾向があるように思われる。

[本音と建前—自己主張の意味]

「みんなでやれば……」式の考え方の表れに本音と建前の使い分けがあると思われる。自分の意見をストレートに出さず、周りの多数意見になるべく合うように本音と建前を使い分けて自己主張をあまりしないようにするが、これが外国人には理解できない。自己主張とは主張を通すことではなく、相手に自分の考えていることを分かってもらう手段と考えるべきで、様々な文化的背景をもった人たちが理解し合うためには自己主張は不可欠の手段だと考えるべきではないか。

[差別していることへの認識]

差別は日本人だけが行っているわけではなく世界中にあるものだが、基本的に差別は悪であって差別の事実を徹底的に明らかにされなければならないという共通認識が日本人には欠けている。日本人は差別に対する認識がないから自分が差別していることに気付かず、自分の行動が差別なのかどうかという疑問さえ持つことができないのではないか。

[平等の意味のとり違い]

日本では、平等というのはみんなが同一であることと考えられているようで、みんなと違う人間は社会そのものに認めてもらえない。日本の国籍をとるためには自分の唯一の証である名前まで変えさせられるというのが一つの例だが、日本人とは違った文化・価値観を認めることが本当の意味での平等ではないのか。

[変えていこうとする自己主張]

日本人の閉鎖性や差別意識は世代が変われば除々になくなっていくのではないかという考え方もあるが、大切なのは変えていこうとする人たちが周りに

積極的に自己主張していくことではないだろうか。法律や制度、さらには社会そのものにもあるとされる差別を、おかしいと感じた人たちから行動を起こしていくことが第一歩だと思われる。

[日本の国際化]

外国人が日本で仕事をすることは不可能に近い。日本人にできない特殊技能がないとビザがおりないのが理由だが、翻って日本人が外国で仕事をする時のことを考えてみると、必ずしも特殊技能があって仕事をしているとは言えないのではないか。こうした不公平が当たり前のように行われていくのであれば、いまに日本人はどこに行っても嫌われ者になってしまうと思う。国際人などとはそれこそ縁遠くなる一方で、摩擦だけが増えていくように思える。

●まとめ

「在日外国人と私たち」という問題は、第三世界と私たちとの関わりを考えて行くうえで最も身近でありながら、また場合によっては、自分たちが身につけてきた価値観を根底から覆さなければならないかもしれないほどに、関わり方の難しい課題でもあると思います。それは例えば、私たちが学校の教科書から習ったアジア諸国と日本との歴史的関係の再認識であったり、またはほんのささいな生活習慣の差であったりと実に様々な側面があると思いますが、いずれにしても自分とは異なる文化背景を持った人たちの存在を認めて同じ人間として付き合うことが一番基本だと考えます。この学習会に参加されたりまたは何らかのかたちで学習会の趣旨を汲み取って下さった方々の一人でも多くが、自己主張することによってこの問題に積極的に関わって下さることを願って、今回の報告を締め括りたいと思います。

(森 千也)

[参考図書]

『日本語学級の子どもたち』 小沢有作編、社会評論社
『たった1つの青い空』 大沢周子、文藝春秋
『こども・外国・外国語—ある日とつぜん英語になってしまった子』 中津僚子、文藝春秋
『日本を見つめるアジアの眼』 田中宏訳編、田畑書店
『日本の中のアジア』 田中宏、大和書房
『じゃばゆきさん』 山谷哲夫、情報センター出版局
『海峡14号—特集・日本人と在日朝鮮人の間』 朝鮮問題研究会、社会評論社
『単一民族社会の神話を超えて』 大沼保昭、東信堂
『神奈川の韓国・朝鮮人—自治体現場からの提言』 神奈川県自治総合研究センター、公文社

彼女たちはなぜ出稼ぎに行くのか

杉野二郎

日系フィリピン人は大叔父さんだった

この春に東南アジアをブラブラして、最後にフィリピンに立ち寄りました。私は特別にこの国の社会問題に特別関心があるわけではないのですが、どうもこの国とは運命的なつながりが深いようです。

そもそも偶然が重なり、3年近くパラワン島でボランティアとして農業指導したのが、この国と関わることになった始まりでした。ちょうど日本からの売春観光が、フィリピンでも日本でも問題になっていた時代です。その当時のフィリピンの外貨獲得高は、1位ココヤシ産業、2位サトウ産業、3位は公式ではありませんが、売春だったそうです。この時は、この国の経済は貧しいながらもそれなりに活発に動いていたように思います。

そんな時代にこの国で暮らしたのですが、私はネグロス島とパラワン島で全く別々に2人の日系フィリピン人と知り合いました。それが偶然にもこの2人は実の兄弟で、間に私が入った事で20数年ぶりにお互いの消息を知ることができました。この話にはまだ続きがありまして、私が帰国してからわかったことですが、彼らは実に私の親戚に当たる人々だったのです。私の父親の叔父が彼らの父親に当たるということで、本当に運命的な出会いでした。

そのようなわけで、今回は手紙だけでまだ会った事のない親戚を訪ねるためこの国を旅したのです。つまり、この国の出稼ぎに特別な関心があったわけでもなく、特別に調べたのでもありませんが、いろいろな所で出稼ぎの問題にぶつかり、またいろいろ考えさせられました。

海外で働く女たち

バンコクからマニラに向かう飛行機で1人のフィリピン女性と同席になり、世間話をしていました。はじめは1人でタイを旅行してきたといていたのですが、話が進むうちに「実はバンコクのインド人の家でメイドとして働いていた」と話し出しました。別に身の上話を淡々とするのではなく、ケラケラと笑いながら話してくれました。この時は私も特別な関心があったわけでもないのに、その場の話として

そのほとんどを聞き流してしまいました。まあだいたいの話は、タイでは英語を話すタイ人のメイドが少なく、タイに住む外国人はフィリピン人を雇うことが多いこと、また一部のタイの金持ちなども、自分の子弟に英語をなじませるため彼らを雇っていること、などでした。

仕事は家事一般でつまらなく、「もうタイでは仕事をしたくない」というのが彼女の感想でした。彼女は以前マニラの高級ホテルの受付で働いていたそうです。なぜタイに行ったのか聞きますと、「やはり仕事としてはホテルの方がどれだけ良かったかわからない。でも賃金のことを考えると、職種は問わずに海外で働くことにした」といいました。

そのような話をしてくれた彼女ともマニラ空港で別れたのですが、別れぎわに以前彼女が勤めていたホテルに紹介状を書いてもらったので、格安の料金で高級ホテルに宿を取ることができました。彼女にはとても感謝しています。そんなわけで、今回のフィリピンでは冒頭から出稼ぎに直面してしまいました。

翌日には今回の目的地パナイ島、イロイロ市に渡りました。ここで、まだ会ったことのない又従姉妹の、リガヤとリリアンの2人が私を出迎えてくれるはずでした。しかし、イロイロの空港で私を出迎えてくれたのは姉のリガヤだけでした。妹のリリアンは昨年大学を卒業したのですが、就職が決まらず、手紙にはどこか海外で働き口を探すしかないんだと書いてありました。そして私が訪ねた時は本当にサウジアラビアに働きに行ってしまった後でした。そもそも私の訪問予定が2カ月ほど遅れたためにリリアンに会うことができなかったわけで、心残りでした。それに、空港でリガヤにその話を聞いた時は、自分の身内が海外に出稼ぎに行ってしまった事で少々ショックを受けました。私が知っていた出稼ぎは貧しいがために海外に出ていく、という程度の事ではなかったのです。

今、姉のリガヤはPAL(フィリピン・エアーライン)のオフィスで働いています。リリアンも一緒に暮らしていたそうです。借家ですが冷蔵庫や白黒テレビもあり、仕事が終われば街に出て、ショッピング

左からリガヤ（一人おいて）私



ングセンターをブラブラしたりと、日本のOLと大差のない暮らしをしています。彼女たちの両親も、隣のネグロス島で田畑を耕しながら雑貨店（サリサリストア）をやっているの、村の中ではそれなりに豊かな暮らしをしています。この一家の娘さんがなぜ出稼ぎにいかねばならなかったのか、初めは不思議に思いました。ネグロス島からパナイ島にもどってリガヤに話を聞きますと、今のフィリピンでは就職しようにもコネがなければ無理で、たとえ仕事があっても十分な収入は期待できないそうです。だから多くの大学生は初めからあきらめて、海外に出て働く事を考えているということでした。

Good Jobさえあれば

この時は一部の特別なケースだと思っていたのですが、これと同じ話をパラワン島にいる別の親戚の娘さんも話してくれました。彼女はこの春に卒業したのですが、就職はまだ決まっていなかったので、「サウジにでも行ってみたら」と冗談をいうと、「両親の所にもどってゆっくり考える」とノンビリしていました。しかし、彼女の友人はまだ学生なのですが、「卒業したらマニラに行って、海外での就職をみつけるつもりだ」と、しっかりスケジュールを組んでいるのには驚きました。

それにしても、いつも仕事の話をしていると、「この国でGood Jobがあれば」という言葉が一度は出てきます。今は最低だけど、やがてコリー（アキノ政権）も安定してくるだろうし、そうすれば不況や社会不安も解決されるだろう、と未来に希望を持っているようでした。

しかし、リガヤの話は学生たちとは少々違っていました。「今のフィリピンはもうガタガタで、大統領がコリーだろうと、マルコスだろうと立ち直る事は難しい。だめなの。だから私もPALを辞めてど

こか海外で働こうと思っている。できればアメリカあたりが最高なんだけど」と、アイスクリームを食べながら普通の世間話をするように話してくれました。私も軽い気持ちで「Good Jobが見つければいいね」と、返事をしました。今になって考えてみれば、PALという大企業で働いている彼女が、学生とは違う側面からこの社会を見ての結論だったのかと思います。とはいえ、マルコス時代には、政治の話は他人事としてしか話さなかった学生たちも、今は身近な問題として政治について話すようになりました。この国も徐々に良くなっていくのでは、と感じました。

国には誰も残らない

しかし現状はリガヤのようにこの国の将来に希望が持たず、多くの人が海外に働きに出かけています。いわゆるジャパゆきさんのように、日々の生活の貧しさからはい出るために出稼ぎに行くのではなく、大学を卒業した中堅エリートが、この国の未来に悲観して、沈没船から逃れるネズミのように自分の国から出ているのです。高学歴のエリートも、頭脳流出で国に留まらない。中堅エリートも海外に働き口を求め、貧しい人々も海外に出稼ぎに行かなければ生活できない。そんな状況になっています。この国の大手の新聞のビジネス欄は、海外での求人広告で全面埋めつくされています。私の出会った人々は特別なケースでは無く、この国の現実として海外に働き口を求めなければならないのを実感しました。

このような状況が進めば、国としてのタガが壊れてバラバラになってしまいます。たとえ残ったとしても民衆の社会は流れ去ってしまって、後に残るのは抜け殻同然の国家ではないでしょうか。これはフィリピンに限らず、国際社会の中で弱い立場にある国では、似たような事が起きているのではないかと思います。国際社会の経済戦争によって安住の地を奪われた人々が、出稼ぎという形で海外に流れ出ていく。新しいタイプの難民なのではないでしょうか。

今回フィリピンを訪ねたのは親戚に会うのが目的でした。自然の成りゆきというか、いたる所でこの問題にぶつかり、帰りの飛行機の中でいろいろ考えたことを少々書きました。しかし滞在期間も短く、何の予備知識も持たずに話を聞いたので、正確にこの問題を把握しているわけではありません。ただ自分の生まれた国で、経済的に自立して生活できない人々がいる、という事はわかりました。

●第17回執行委員会

頭の痛い財政問題

第17回執行委員会が8月1日(土)午後2時よりJVC 東京事務所で開かれた。今回は6月7日の総会で承認された新役員による初の執行委員会となった。

JVCの組織図がよくわからない方に説明すると最高意志決定機関は年1回の総会である。運営上の重要事項の決定や規約の改定などはこの場で行われる。執行委員会は総会からJVCの運営に関する責任を任されている。JVCの活動は常に動いているので、年1回の総会では大まかな活動の合意は取れても、個々のプロジェクトや人事に関し機敏に対応することはできない。したがってプロジェクトの開始や終了等の決定も3カ月に1回開かれる執行委員会に委ねられている。

今回は初顔合せでもあり、自己紹介を兼ね、JVCはどうあるべきか、どうすべきか、提案も含め率直に意見を述べていただいた。

本田 JVCに関してきた人の中でジェネレーション・ギャップが生じていないか。今までJVCを作り上げてきた人たちが再び働けるように、人材をストックするシステムを作っていただきたい。

岡本 海外での活動よりも、その活動を通して国内の人々にどうインパクトを与えるかが問題だ。東金農場の位置づけもはっきりしていないと思う。それから海外での活動経験を新しい人々に伝えていく、人を育てていくシステムも必要だと思う。

中田 この2年間JVCとの関係で仕事をしている。現在は竹を使わない上総掘りを研究しており、目鼻もついた。今後はアフリカに適した方法を見つけ、井戸掘りの人材も育てたい。

秋山 自分は「協力隊を育てる会」の会長を勤めているが、自分のような立場の者が何ができるか教えてもらいたい。JVCは操縦する人がたくさんいるがその人たちが整備もするのでは大変だ。そろそろ機能分化してもいいのではないか。

小島 ずっと農業、林業に携ってきた。JVCのソマリア、エチオピアにも行った。そこで感じたのは金、

物の使い方が荒いということだ。車の使い方を知らないために無駄にしている。

バスカビル キリスト者として貧しい人、持てない人に関心がある。何かお役にたてることがあればやりたい。非営利団体の場合、会社等と違って評価が難しいが、目標を設定し、3~5年の計画をたてると評価がしやすくなるのではないか。

またJVCは慢性的な“金欠病”でいつもファンド・レイジングには頭を悩ませている。その方策については以下のことが話しあわれた。

星野 ①ドナー(出資団体)にJVCを支援していただくだけでなく共同でプログラムを行う。②ドナーを現場に招き十分に視察してもらう。③神奈川県等地方自治体の援助を得る。④JVCを支える市民連合のようなものができればよいが。⑤財政緊急アピールを出す。⑥スタディ・ツアーを行い、市民に海外の実情を知ってもらう。などを考えている。

岩崎 JVCは海外での活動と第三世界の問題を国内に伝えるという両面が要求されているが、これまでは後者が弱かった。資金に関しては来年度まで持ちこたえられるか疑問だ。いっそうの努力が必要だ。

バスカビル 外国人の目から見ると「日本にはお金が沢山ある」ように見える。寄付を受けたら必ず報



●今年も完走、チャリティ・サイクル

飢餓からの脱出と地球の緑の回復を求めて8月4日から日本縦断チャリティ・サイクルを行っていたジュリアン・バンフォードさんが、26日無事目的の沖繩に到着した。出発点は昨年と同じ宗谷岬だが、最終地点は昨年の九州よりさらに遠く沖繩になった。

今年もジュリアンありがとう。送っていただいた62万円はエチオピアの復興のために使います。

新入会員 (1987年5月21日～7月31日)

一般会員

千賀チズ, 坂神敬子, 河原光男, 大井澄江, 赤塚真理, 桐生永見子, 丸山展枝, 今村雅子, 手塚千砂子, 平石美和子, 松崎裕子, 林 正男, 長瀬修, 林ひろ子, 公文名 眞, 太田泰雄

活動者会員

岩崎美佐子, フォード・順子, 山田 盛, 船波恵

子, 尾上ゆき子, 大川純子, 堀川博司

学生会員

中川勇和, 宮澤修子, 飯塚美奈, 水野朋子, 佐原康之, 高橋良一

賛助会員

笹岡小夜子, Y.Akatsuka, 佐藤勝美

告することが大切。プロジェクトが失敗してもまたお金をを出してくれる可能性がある。

室 お金を得る所として考えられるものは、① ODA ②企業③宗教団体④財団⑤労働組合⑥普通の市民などがある。JVC はこれまで最もお金のある①②④⑤を避けてきた。きれいな金だけというのならプロジェクトを縮小せねばならない。IBM, フォルクスワーゲンなどは NGO に支援を送っている。日本の企業の中にもそういう気運が生まれる時期だと思っている。

岩崎 ODA は協議会等団体でもらうのは賛成だが、そういうものを作るのにあと3年はかかるだろう。

室 JOICFP (家族計画国際協力事業団) は笹川財団から半分以上の予算をもらっているが、それによって非難されたことはない。

岡本 財政は第1に大衆的基盤を目的とすること。しかし緊急避難的に様々な相手に働きかけることは反対しない。2番目は原則を確立し、それを相手にも提出できるようにすること。

本田 なかなか割り切れない問題だ。こういう運動をやるのは私たち自身をとらえなおすということで、それに反するようならい方はしない方がよい。

バスカビル きれいなお金が何であるかはわかりにくい。もっと大衆に財政アピールしたらいいのではないか。ODA は円高で拡大しているが、日本政府のイア・マーク (指定寄付) は拡大する可能性があるか。

星野 ソマリアしかもらっていないが、カットされている。それに日本政府 (外務省) の担当者が変わってしまったら、まったくなくなってしまうこともありうる。

バスカビル 国民の税金が直接現地に届いていない。政治的にもアピールしていくべきではないか。

佐藤 企業, 財団, 労組には積極的にかかわっていくべきだ。慈善という枠ではどうしようもない。日

常に企業, 財団の恩恵を抜きにしては活動は広がるはずはない。企業そのものを変えていくような力が必要だ。しかし一朝一夕には解決がつかず、長期的に調査していく。

岩崎 JVC は自分たちの生活のあり方が重要な意味を持っている。金にしばられたシステムを助長するような一部の企業とは直接関係を持たない方がいいのではないか。あとはどンドン当たたらよい。

室 市民レベルのお金を集めるのは大変だ。良質な活動をしているのは JVC ばかりではなく、競合していることは忘れてはならない。

岩崎 物を売ることが NGO の間では盛んだが。

室 第三世界ショップのことか。OXFAM はイギリス全土に777店持っている。それが活動資金の30%にもなっている。JVC も考えたらどうか。

JVC の決定は決して密室の中で行っているわけではなく、毎週月曜日に行われる自由参加のミーティングで討議されることがベースになっています。日常の細かなことはこのミーティングでほとんど決まってしまう。しかし個々のプロジェクトの方針とか財政問題はどのように執行委員会によって話し合われます。

これまで執行委員会についてお知らせすることがありませんでした。今回話し合われた財政問題は JVC の根幹にかかわるものであり、会員の皆さんにもぜひ考えていただきたい問題です。御意見, 御提案等がありましたら事務局までお寄せ下さい。

出席者 (敬称略)

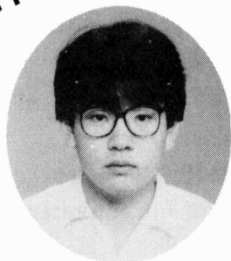
〔執行委員〕秋山忠正, 岡本 厚, 小嶋通雅, デイブ・バスカビル, 中田正一, 星野昌子, 本田 徹, 室靖, 岩崎駿介, 伊従直子 (委任状出席), 熊岡路矢 (委任状出席)

〔監査委員〕佐藤安信, 丹羽秀夫 (委任状出席)

兵士との出会い

井戸修理チーム

伊藤文影



国境の村へ

戦争が起こると道路は良くなるものだ……たとえそれが隣国であったとしても……。

車のメーターは時速80キロをきることはなかった。舗装道路でスピードを落とすのは、牛や犬が路上にいるときか、ゲートをくぐる時ぐらいである。未舗装の道路でも、たいてい60キロで車は走っていた。このぐらいのスピードだと、雲は急速に立体感を増してくる。この付近にはとりたてて高い山もなく、低い綿雲がどこまでも広がっているため、空が広く感じられる。

土地は宅地や、水田、キャッサバの畑に休耕地（とはいっても、休ませたくて休ませているのではないだろうが）の4つに大きく分けられている。宅地の多くは丘陵地にあり、そのまわりにキャッサバの畑が広がっている。バンコクから走ってくると、このあたりに特にキャッサバが多く感じられる。今年は雨季にもかかわらず雨が少なく、特に休耕地が目立つ。

我々が作業を行ったのは、タイ・カンプチア国境が南北から東西へとカーブするあたりの国境沿いの、14村41のうちの10個の井戸であった。

作業は調査、新しいローイング式ポンプの設置、チェックとアドバイスという順で行われた。まず調査の段階で、ふたを開け、壊れたポンプを外すのであるが、これが一番の大仕事だった。ポンプの設置はすべての井戸を対象に行うのではなく、1～3の村の人々を集めて、デモンストレーションという形で行われた。それ以外の井戸は村人自身の手によって設置され、以後壊れた場合の修理も彼ら自身の手によって行われることも大きな目標としていた。

たいていの説明は、リーダーであるJVCのカモン・ミンムアン氏によって行われた。セメントを作る場合も、初めての我々より村人の方がかなり上手である。そんなことだけでも、我々が彼らから学んだものの方が大きかったといえるだろう。

2人の兵士

8月14日……王妃誕生日（8月12日）の影響で、注文した荷物の輸送が遅れた。そのため予定を変更し、すでにポンプの設置が終わっているバン・サイ・ト1とバン・サイ・ト・10のチェックを行うことになった。この付近にはサイ・トとか、サイ・トリなどという村（バン）の名前が多い。サイとはline、トやトリはTwo, Threeといった意味であるという。バンコクのJVC、柴田氏の説明では、この周りの人々は隣国などから攻められた際の“鳴子”として、国境沿いに移住させられたのだという。

バン・サイ・ト・6のチェックを終え、バン・サイ・ト・10に入る。この村では、我々が作業に慣れるために、村にある3つの井戸すべてについて村人との共同作業でポンプを設置した。

そのようなこともあって、この日我々がこの村を訪れると大層な歓迎ぶりであり、昼前から村長さん宅の庭先でいっしょに酒を飲むことになった。さっきまで我々のまわりを走っていたアヒルを村長さんの息子さんが料理し、それを食べながら焼酎を飲む。

クメール語とタイ語と英語と日本語の交じりあった会話が続き、焼酎の3本目が空いた頃だろうか、かつて村長さんの近所にいたという2人のクメールの兵士がやってきた。ロー・スィー氏（43歳）とゴーン氏（30歳）である。ロー・スィー氏はふっくらとした丸顔のやさしそうな人で、ゴーン氏はさわやかな好青年という感じである。彼らはシハヌーク派の兵士で、国境付近に8年間住んでいるという。翌日の午前10時には、キュー・サムファン（ボル・ポト派）に攻撃を開始すると打ち明けた。武器を持たずに約3kmの道のりを歩いてきた彼らは、タイ兵に見つかれば逮捕される。目の前の道路をタイ兵を乗せたトラックが走り過ぎて行った。

小1時間経ただろうか、帰るといって彼らと握手を交わした。彼らの手は暖かかった。

彼らはあの手で“自分の土地を取り戻す”という信念のもとに、たとえクメール・ルージュであったとしても、同じ国の人を殺せるのだろうか。紙の上でしか“戦争”や“虐殺”を知らない私にとって、考えることはできても“理解”することは難しいことである。彼らとの出会いは、理解できないことの連続だったといえる。

次の朝、我々の頭上をヘリコプターが超低空飛行で国境へと飛び去っていった。

JVCプロジェクト

1987年8月25日 現在

活動地名	活動内容	出資団体	担当者
東京本部	<p>渉外, 事業計画, 資金調達, ボランティア調整, 会計, 総務, 情報収集および広報等。 機関誌「トライアル・アンド・エラー」発行。 JVC説明会—毎月第1月曜日 午後6時～9時 第3土曜日 午後1時～4時 学習会 月1回 午後6時～9時 (希望者にはハガキにて連絡)</p>	全国社会福祉協議会	<p>岩崎駿介(代表) 星野昌子(事務局長) 佐々木志保, 林 達雄, 前川昌代, 鶴田三芳, 古西 勇, 富安光子, 岩崎美佐子, アイネス・バスカビル</p>
神奈川県 (JVC 神奈川)	<p>神奈川県内における渉外, 事業計画, 情報収集, 資金調達等を行う。 神奈川県及び県内の市民団体との共同事業の企画, 運営。定住難民プロジェクトのコーディネーション JVC説明会—毎月第1火曜日 午後6時～9時 毎月第2土曜日 午後1時～4時</p>		山口誠史
日本国内	<p>●定住難民プロジェクト 住んでいる地域によってボランティアの連絡網を作った。各地区には連絡員を置き, 今後は緊急の連絡や交通費の精算はこれらの連絡員を中心に行う。 第2回法律学習会がJVC 神奈川で開かれた。講師を含めて10人の参加があり, 外国人登録や難民の法的地位に関する学習を行った。</p>	<p>ジャパン・タイムス 神奈川県福祉部 横浜キワニスクラブ, 全国老人クラブ連合会 国際交流ホスピタリティ・トラスト</p>	<p>山口誠史, 他約60人</p>
	<p>●東金農場 畑の草とり, 田のあぜの草刈り, ヒエ抜き等を行った。 8月21～23日に女子栄養大学の磯田厚子さん主催の栄養学セミナーが開かれた。</p>		<p>井本勝幸, 五十嵐裕昌, 松岡美奈子, 飯塚美奈</p>
エチオピア (ウオロ州)	<p>●総合的復興促進 内山田 康がエチオピアを離れ, 加納 妙がエチオピア代表を引き継いだ。</p> <ol style="list-style-type: none"> 種子銀行 耕作用の牛を持たない農民に分割払いによる役牛の販売を開始した。また大雨季(6月末～9月)を前に, 大麦, 小麦の種子の貸しつけを行った。 植林 ようやく雨が降り, 土壤保全林の植林を終えた。家庭植林用の苗木を配った。 農業教室 村人に対して, 土壤保全・植林, 有機農業を指導する農業教室を開始。小学校での環境教育は継続中。 保健・栄養 母子教室, 家庭菜園の奨励を訪問形式で行っている。農業省による短期婦人家庭教室の一部を担当した。地元診療所とともに母子健康相談も実施。 井戸, 給水 マーシャ村に深井戸を2基掘った後, 水場の汚染を防ぐための「泉の保護」を実施中。 チェック・ダム(砂防ダム)建設 V字谷浸食防止のための石積み作りを普及中。 コレブ地区1200家族を対象に food for work による緊急食糧援助を始めた。この地区では食糧備蓄が1カ月分しかない。 	<p>CRDA, 西本願寺, チャリティ・カレンダー, チャリティ・サイクル, メリノール修道士会, 全国老人クラブ連合会, バンド・エイド, 日本漫画家協会, 東京グリーン・ウォーク ジャパン・タイムス</p>	<p>加納 妙, 伊藤達男, 伊藤幸子, 有本敦子, 山田 盛, イエットベルク, ソロモン, バレタ, フェテルワルク, ダニエル</p>

活動地名	活動内容	出資団体	担当者
ソマリア マガネイ・キャンプ (ゲドー郡) ハルバ・キャンプ (ゲドー郡)	<ul style="list-style-type: none"> ●農業による自立促進 去る5月の洪水の影響で、農地拡張工事の進行が少々遅れている。しかし、従来のマガネイ・キャンプ周辺のみならず、マガネイ・キャンプから約25km離れたハルバ・キャンプ周辺でも工事にかかった。この地域は、ルーク地区で最も農地に適した一帯である。また植林活動は苗木が不足するくらい順調に進んでいる。 ●現金収入プロジェクト(インカム・ジェネレーティング) 6月20日から始めたかじ屋は非常に盛況でお客が多い。またパン屋については1人の難民を選び、ハルバ・キャンプで研修した。現在はマガネイ・キャンプで開店の準備をしている。 ●コミュニティー・サービス 七輪、香炉、灰皿の製作コースは新しい生徒13名を受け入れ、6月13日より再開した。とても好評である。また帽子屋では1人の職人と3人の見習いが伝統的帽子の製作と訓練を行っている。 	UNHCR, 創価学会文化・ 平和運動事務局 仏国土をつくら う会	嶋 紀晶, シアッド, 萩ノ迫善六, 船川秀夫, 中岡哲也, モハメッド, ラシッド, ハジ, アオキ, アブディ ・ジョフ, フセイン, ア ハメッド, ハッサン
ジャボレ・キャンプ (ヒラン郡)	<ul style="list-style-type: none"> ●植林 ジャボレ・キャンプにも大雨があり、各所に植えた苗木が順調に育っている。今は次の雨季(10~11月)に備えて、苗木作りや貯水槽作りを行っている。 ●現金収入プロジェクト ドンキー・カート(ロバ車)による水売りは月々確実に借金をJVCに返している。1人は借金を全額返済し、独立した。しかしパン屋はお客の減少という問題に直面している。原因は安い小麦粉が難民の手に届くようになったためだ。 ●家庭菜園 我々が直接手を下す形の活動はやめ、すでに普及したこの活動がいかに難民の中に定着するかを今後は見てゆく。 ●その他 大工の訓練、レクリエーションなども着手したが、現在は終了した。 	朝日新聞厚生文 化事業団, 砂漠に種をまく 人の会 R.I. ジャパン	浜野敏子, 米澤 聡, 庄司 美, シュクリ, ハッサン, アブディ, シュイク・アブディ
カンブチア (ブノンベン カンダール省 プレイベン省 スバイリエン省)	<ul style="list-style-type: none"> ●カンブチアの人々への総合的人道援助 8月前半までの降雨量が非常に少なかったため、各地で井戸の水枯れ、湖・池の低水位、河川の孤立(とぎれ)などの報告が相次いでいる。コンボンスプー省の農民の記憶では20~30年に1度の干ばつであるという。 <ol style="list-style-type: none"> 1. サンタピエック(平和)技術学校・ワーク・ショップ 校舎・修理工場は完成し、8月15日と17日にスタッフの選考が行われた。メカニック、同アシスタント55人を含む81人のスタッフが選考された。 2. 井戸掘り/給水(OXFAMと共同) プレイベン省、スバイリエン省で続行中。 3. プレック・ピノウ孤児院援助 8月13日、男子の補修完成。雨漏りもなくなり非常に明るくなった。雨といも水タンクも完成し、あとはトンレサップ川からの給水と浄水システムを残すのみとなった。 4. 補助栄養給食 カンダール省ブノンベン郡またはブノンベン市ポントック地区のRINEセンターの担当が内定した。保健省、ブノンベン市、保健局、ユニセフ、EDC(フランスのNGO)との共同活動となる。 	全国老人クラブ 連合会, 創価学会文化平 和運動事務局, モラロジーMIRC, 立正佼成会, 自動車労連, 庭野平和財団, ILCチャリティ グループ, 西本願寺, 善興寺ダナ基 金, 高岡青年僧侶会	熊岡路矢, 簗田健一, 簗田玲子, 馬 清, マリー・キャマル

活動地名	活動内容	出資団体	担当者
タイ バンコク事務所	渉外、事業計画、資金調達、ボランティア調整、会計、総務、情報収集および広報、バザー、古本のセール。季刊「ニュース・レター」(英語・タイ語)発行。	全国社会福祉協議会	ボンピモン・チャイブーン、柴田久史、カモン・ミンムアン、スニー・ティチャリヤクン
カオイダン (カンブチア 難民キャンプ)	●西崎憲司記念技術学校 ソーシャルワークの訓練を受けた経験のあるクメール人を2人雇い、オフィスのワーカーと協力させ、身体障害を持つ生徒のためのスペシャルチームを設置した。 毎日のモニタリングが密になった。キャンプ内での仕事は主にタイスタッフがきりもりし、日本人スタッフは来年度に向け、資金集めに動いている。	UNHCR R.I. ジャパン	矢野和貴、谷山博史、ソムヨット・ラタナタム、パイトゥーン・チマチュイ
国境のサイト2、 ノンチャン (カンブチア 難民村)	●補助給食・栄養保健教育 森へまきを取りに行こうとした難民夫婦をキャンプ内の民兵が射殺したなどが原因で、7月31日から8月4日まで入場が制限された。 最近は特にキャンプ内の治安状態が悪く、NGO、UNBRO、タイ国軍の間でもミーティングが行われてきた。	WFP/UNBRO	テリース、ブーム、チャンチャイ、トンバイ、スピチャ、北代るり、ソムサク、カレン、エッ、前野博美 アドレアン
バナニコム (第三国定住待ち 難民一次収容施設)	●文化オリエンテーション 8月4日、日本定住予定のラオス難民55人がバンナポー・キャンプより到着した。そのうち14歳以上の38人に、10日から日本語授業を開始した。 15人の生徒とその家族計28人のクメール難民が日本に出発するため17日キャンプを離れ、バンコクに移った。9月1日日本到着予定である。 去年の暮れカオイダンから移されたクメール人の最終グループの生徒19人は、日本出発の日を待ちわびながら日本語を学習中。	天理教千葉	石原淑子、落合正幸、フォード・順子、赤坂泰央、アナン・ブダミリンプラ ティープ、ウィバ・ロンプリック
地域開発 (バンコク市内の スラム地区)	●奨学金援助 本年度の報告書作成が終り、発送作業を行っている。 新しい子供のインタビューをモナリザ、タッケオ、ワットヤイのスラムで行っている。 ●クロントイ図書館 NHA(住宅公社)から許可もあり、工事は順調に行っている。 ●移動図書 タックロイを訪問し、現状調査を行った。バンコク市内では本の入れ替え、巡回指導を随時行っている。 ●移動学習センター(プラティープ財団、FFSC、JSRCとの共同プロジェクト) 9のスラムで学習の機会のない子供たちのため人形劇などで教育、また母親グループの育成を行っている。	モラロジーMIRC、JOFIC、庭野平和財団、京都国際青年委員会	ヴァラナート・チェンクン、サムルアイ・ジョンヨークラン、アルニー・スニットムンヴァイ、リーラ・クンナロン、スワン・リンサムバン、コメン・スンサマラヤ、柴田久寿子
	●井戸修理プログラム JVCが1982年から4年間に東北タイで掘った80本の井戸を清掃し、修理を行うため、夏休みを利用して参加した学生の第一陣が帰国し、第二陣が出発した。		カモン・ミンムアン、大沢剛史、瀬口圭司、長谷川 勉
人材派遣プロジェクト			
フィリピン (PFAC, バラワン島)	●国際移民委員会(ICM)一第三国定住手続きにともなう医療業務及びキャンプ内でのプライマリ・ヘルスケア。	城西病院	石井弘代

JVCの活動とその目的に御理解を

▶**JVCとは**— Japan International Volunteer Center は1980年2月、タイのバンコクで設立された民間救援団体です。1979年暮れの、インドシナ難民の大量流出をきっかけに、日本から駆けつけた若者と、現地タイですでに活動を始めていた日本人とが一体となり、現在の組織の原形ができました。JVCは、活動者の自発的な意志に基づき、日本の個人・団体からの寄付金、国連機関からの委託金等によって運営されています。JVCは、人種、国籍、習慣、宗教その他の信条の違いを越えて、難民および同様の窮境にある人々を対象にできる限り継続的な活動を行います。

▶**JVCの会員募集について**— 会員は、総会に出席し、JVCの方針などを決定する他、情報・資料の入手、各種の活動・報告会・上映会・学習会等へ参加することができます。また正会員には自動的に、機関誌(T/E)をお送りいたします。会員の種別と年会費は以下の通りです。

- ・正会員 (一般会員 10,000円 活動者会員 3,000円
団体会員 30,000円 学生会員 3,000円)
- ・賛助会員 金品による支援(金額は自由です。)

▶**機関誌『Trial & Error』のみの購読について**

- ・毎号1冊送付 年間購読料 3,000円
- ・毎号4冊送付 年間購読料 10,000円

▶**送金の方法**— 下記の口座へ郵便振替にてご入金下さい。

- ①会員：東京5-48365 加入者名—JVC 会員係
- ②T/E：東京3-54186 加入者名—JVC 東京事務所
(住所、氏名、購読開始月をお書き添え下さい。)

▶みなさまの募金を支えるJVCの活動— 救援活動をより充実させるため、以下の募金をお願いしています。なお募金の20%をJVCの運営経費に充当させていただきます。

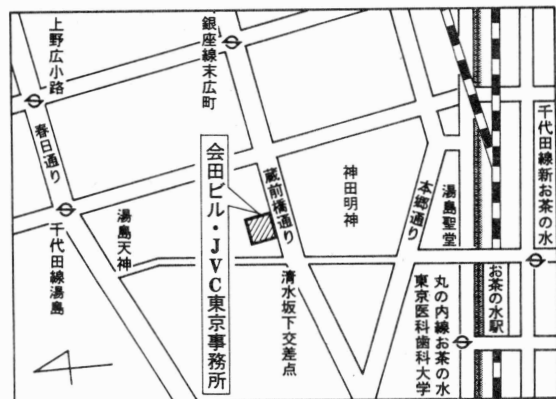
- A. **アフリカ難民救援募金** (8月小計 7,000円) アフリカの難民・飢餓民への救援プロジェクトに使われます。
- B. **グリーン・フォー・アフリカ募金** (8月小計 322,400円) アフリカの土壌回復、農業、植林等に使われます。
- C. **インドシナ難民救援募金** (8月小計 6,000円) タイ国内にある各難民キャンプのプロジェクト費にあてられます。
- D. **カンブチア募金** (8月小計 34,000円) カンブチア国内の復興のために使われます。
- E. **タイ・スラム募金** (8月小計 2,000円) バンコク市内のスラムにおける生活向上のためのプロジェクト及び図書活動に使われます。
- F. **デッグ・スラム奨学金・基金** (8月小計 68,250円) バンコク市内のスラムの子供達为学校へ通う費用を援助します。
- G. **タイ農村募金** (8月小計 0円) タイの農村開発のために使われます。
- H. **定住難民募金** (8月小計 5,000円) 定住難民のための日本語教材費と家庭教師の交通費に使われます。
- I. **JVC運営経費募金** (8月小計 52,000円) 現場を支えるのに不可欠な事務運営経費、人件費に使われます。
- J. **無指定募金** (8月小計 13,300円)

▶**送金の方法**— 下記の口座へ郵便振替にてご入金下さい。
東京9-27495(募金種目名をご記入下さい。)
加入者名—JVC 東京事務所

編集後記

▶土地がバカバカしく値上がりしている。地上げ屋の波が神田あたりからじわじわと押し寄せ、いつこの湯島のオフィスも撤退ということになりかねない。郊外のちっぽけな住宅がJVCの年間予算と変わらないのだ。いったいどこにお金が行って行くのだろう。

難民の人たちの雇用状況を調べることは日本の労働状況を調べることだった。難民たちは日本人の働きすぎにネを上げている。日本人はお金をためることは知っていても、使うことを知らないオロカモノなのか。大企業のトップが9日間夏休みをとったことが新聞ダネになる。わが日本は貧しいのである。



昭和62年9月20日発行(毎月20日発行)

編集人 前川 昌代
 発行人 星野 昌子
 発行所 日本国際ボランティアセンター(JVC)東京事務所
 〒113 東京都文京区湯島3-1-4 会田ビル5階
 ☎03(834)2388 FAX:03(835)0519
 Telex:7604025 JVC HQ UC

神奈川事務所 〒231 横浜市中区山下町2 産業貿易センタービル9F (助神奈川県国際交流協会内) ☎045(671)7082

バンコク事務所 JVC THAILAND
 29/3 Soi Saengchan, Sukhumvit40,
 Rama 4 Road, Bangkok 10110.
 ☎391-1117

ソマリア事務所 Telex:87032 COMSERV TH
 JVC SOMALIA
 c/o UNHCR P.O. Box 2925
 Mogadishu,
 Telex:794 HICOMREF SM

エチオピア JVC ETHIOPIA
 事務所 P.O. Box 6941 Addis Ababa

カンブチア JVC KAMPUCHEA
 事務所 203 Monorom Hotel Phnom Penh
 Letter:c/o ICRC, P.O. Box 11-1492
 Bangkok.

印刷所 (株)ベスト・プリンティング

※本誌の記事・写真等の無断転載・複写を禁じます。

定価 送料共300円